

色と音声のパラレリズム

——アルベルトゥス・マグヌスの聴覚論——

小林 剛

序

アルベルトゥス・マグヌス（一二〇〇—八〇⁽¹⁾）は、西欧中世を代表する神学者、哲学者の一人であり、トマス・アクィナスの師として有名な人物であるが、代表的な自然学者でもある。アルベルトゥスは主に『被造物大全（Summa de creaturis）』第二巻、通称『人間論（De homine）』と、アリストテレス『靈魂論』の註解であり、これと同じ題名を持つ自身の著作の中で、アリストテレス『靈魂論』第二巻に依拠しながら、詳細な感覺論を展開している。その中でアルベルトゥスは、後で本稿の中でも見るように、光と魂の理性的能力との間に見出される類似性について語っている。

光と魂の理性的能力との類似性と聞くと、代表的な新プラトン主義思想家であるプロティノスが思い出される。プロティノスは、光に喩えられる一者から、やはり光に喩えられる叡智が、太陽に喩えられるものとしての叡智を通して、月に喩えられる魂に与えられると語っている。⁽²⁾しかしながら、ここでの光と魂の能力との類似性は、光に比べれば我々にとって身近なものではない魂や叡智を分かり易く説明するために、喩えとして使われているものなのであって、光そのものと理性的能力とが実際のどのくらい類似しているのかということについては、あまり問題になっていないように思われる。

これに対してアルベルトゥスは、アリストテレスに依拠した感覺論という文脈の中で、まず、光を視覚対象である色の原因として、そして理性的能力を聴覚対象の一つである音声の原因として、それぞれ別個に考察する。そしてその上で、両者がどれほど類似しているかを吟味している。本稿では、この点に関するアルベルトゥスの立場を明らかにすることによって、光が西欧の自然哲学・自然科学史全体を通して極めて重要な地位を保ち続けてきた理由を説明する手がかりを得たいと思う。

一 問題設定

私は以前、アルベルトゥスの視覚論について検討する機会を得た。ここでは、アリストテレスに従い、視覚対象は色であるとされ、そして、色を生じさせ、色に赤や青などの形象を与えるのは光・光輝であるとされている。しかし光・光輝そのものは色ではなく、固有な意味では恐らく視覚対象で足りない。アルベルトゥスに言わせれば、光・光輝とはそもそも、空気や水やガラスなどの透明なものを透明なものにする現実態であり、それ以外の不透明なものは、空気や水の元素を構成要素として自らのうちに持っているかぎりで光・光輝を分有し、そのことによって初めて目に見えるものとなる。そしてこのとき光・光輝は、不透明なものに分有されることによって限定され、この限定によって赤や青などの個々の色に成り、そこで初めて視覚対象と成るのである。⁽³⁾

さて、本稿の目的はアルベルトゥスの聴覚論を検討することである。まず第一に、聴覚対象である音を生じさせ、音に様々な形象を与えるものは何であるのかを明らかにしたい。そしてさらに、視覚対象である色を生じさせ、それに形象を与えるものである光・光輝が限定されて色に初めて成るのとちょうど同じ様に、音も、それを生じさせ、それに形象を与えるものが、何らかの仕方限定されて音に成るというようなことがあるのかどうかを検討したい。というのも、色を生じさせるものである光・光輝が限定されて色に成るという構造は、視覚に独特なものであるのか、それとも、視

覚だけでなく、すべての感覚、あるいはすべての認識に共通した構造であるのか、つまり、感覚対象、認識対象を生じさせるものは必ず、何らかの限定を受けてその感覚対象、認識対象そのものに成るというようなことをアルベルトゥスは考えていたのかどうか、そこをはっきりさせたいのである。

二 音 一 般

アルベルトゥスによれば、一般的に音を生じさせるものは、直接的には空氣の溢れである。そして間接的には、その溢れを生じさせるもの、あるいはその運動である。これは現代科学が音のことを空氣の濃淡の波（疎密波）と考えているのと非常に類似しているように思われる。⁽⁴⁾

引用 1

アルガゼルが彼の『自然学』で言っているように、音とは、何かが互いに激しく打ち合ったり裂かれたりすること⁽⁵⁾で生じる非常に強い運動によって空氣に起こる溢れのために空氣中で生じる何かのことである。だから我々は以下のように言う。音とは、空氣の運動の氾濫から生じ、それとともに存在する感覚可能な性質である。

アルベルトゥスはなぜここで、アリストテレスではなくアルガゼルを引用したのであるうか。それは恐らくアリストテレスが、「音を生じさせるものは打撃である」⁽⁶⁾程度のことしか述べなかったからであろう。それに比べると、アルベルトゥスが受け継いだアルガゼルの分析の方がはるかに詳しいものとなっている。アルベルトゥスはさらにこの箇所の少し先の章で、アルガゼルを参考にしながら、打撃以外で空氣の溢れを生じさせる運動についても詳細な考察を展開している。⁽⁷⁾

そして、アルベルトゥスによれば、音に形象を与えるものは、空氣の溢れを生じさせるものの一部である。

引用 2

(音は)鋭(高)、重(低)における形象の相異を、打たれるものの相異から受け取る。なぜなら、金属と木とが異なる仕方では音を発するのが見られるからである。もし空気だけが音の基体であつたとしたら、音はこのような相異を有することはないはずだ。⁽⁸⁾

ここでは、打撃によって空気が溢れて音が生じる場合しか考慮されていないが、それはこの箇所が、「音を生じさせるものは打撃である」としか言わなかったアリストテレスの『靈魂論』の直接的な註解の一部であるからであろう。打撃以外の運動によって生じる音に形象を与えるものが何であるのかについてアルベルトゥスが詳しく述べている箇所は今のところ見当らないけれども、打撃の場合に準じて解釈すべきであろう。すなわち上で述べたように、どのような運動によって空気が溢れ、音が生じるとしても、その運動を起すものの一部が音に形象を与えるというのがアルベルトゥスの考えであると解釈すべきである。

では、以上のように、音を生じさせるものが空気の溢れ、あるいはそれを生じさせるもの、またはその運動であり、音に形象を与えるものが、空気の溢れを生じさせるものの一部であるとするならば、それらがちょうど光・光輝と同じ様に、何らかの仕方では限定されて初めて音に成るというようなことは果たしてあるのであろうか。結論を先取りして言えば、アルベルトゥスに従う限り、そのようなことはないと言わなければならないと思われる。

その理由は以下の通りである。

一のところでは、以前アルベルトゥスの視覚論について検討したということを述べたが、そこではそもそもなぜ光・光輝は限定されて視覚対象に成らなければならないとされていたのかと言うと、それは端的に言えば、光・光輝そのままでは、本質的に視覚器官を破壊してしまうものだからである。アルベルトゥスに言わせれば、光・光輝は本来、天体の属性である。天体は、アリストテレスに従い、他の物体を動かすはするが、固有意義では他の物体からいかなる作用を被ることもなく(non pati)、それゆえ不可減な物体であるとされる。一方視覚器官は、作用すると同時に作用を被

ってしまう可滅的な物体である月下の四元素（火、空気、水、土）から構成されているとされる。だから光・光輝も天体と同様、作用はしても作用を被ることがない性質であるので、天体（特に太陽）から来る光輝が無制限に視覚器官の中に入ってしまうと、視覚器官は一方的に作用を被ることになり、結果として破壊されるまでに至るのである。

このような、天体、光・光輝などの天体の属性と、月下の物体およびその属性との間に在る相異は、それが対立性を持つか持たないかということに基づいている。すなわち、天体や光・光輝には対立するものが存在しないが、月下の物体とその属性には対立するものが必ず存在するのである。

それでは、音の場合はどうであらうか。少なくとも、空気の溢れを生じさせるもの、およびその運動には対立するものが必ず存在するように思われる。なぜなら、打撃や破裂など、空気の溢れを生じさせるような運動には、アリストテレスが言うところの強制運動が必ず含まれるように思われるからである。⁽⁹⁾ 実際アリストテレスによれば、すべての運動は強制運動か自然本性的運動であり、強制運動とは、重いものが下へ落ちる運動か、軽いものが上に上がる運動であるところの、月下の物体の自然本性的運動と対立する運動のことなのである。⁽¹⁰⁾

しかしここで一つ問題が生じる。アルベルトゥスは別な箇所で、強制運動は空気にとって或る意味で自然本性的運動であると言っているのである。⁽¹¹⁾ もしそうであるならば、空気にとって強制運動は事実上存在せず、すべての運動が自然本性的運動であるということになるであらう。そうすると、たとえ空気を溢れさせるものの運動自体は強制運動であり、何らかの自然本性的運動と対立するものであるとしても、それによって生じる空気の溢れに関しては、それと対立する運動はもはやどこにも存在しないということになるのではないだろうか。

強制運動は空気にとって或る意味で自然本性的であるという考えにアルベルトゥスが至ったのは、アルベルトゥス自身の引用からすると恐らく、次のようなアリストテレスの考えに基づいてのことであらう。

空気は、力によって押され、力の源を受け取ると、軽いものとしては上昇運動を、逆に、重いものとしては落下運動を生み出すであらう。⁽¹²⁾

この箇所は、強制運動によって投げられた物体が、その物体を投げる主体から離れた後、物体自体が作り出した周囲の空気の流れに押されて、最初に投げられたのと同じ方向にしばらく飛び続けるという、有名なアリストテレスの投射体理論に係わる文脈の中で登場する箇所である。

確かに、空気の溢れを生じさせるもの、またその運動、あるいは、それによって生じる空気の溢れと空気そのものとの間には対立性がないようにも思われる。しかしながらアルベルトゥスによれば、少なくとも空気の溢れどうし、そして、それによって生じる音どうしの間にはやはり対立が生じる場合があるように思われる。それは、或る音が他の音をかき消したり、同じ大きさの音どうしが或る場所で互いを無にし合ったりするような場合である。

引用 4

解決…我々は以下のように言う。大きく、対立していて、妨害し合っている音は、それらが接触する場所で、両方の混ざった音が生じるという仕方で、互いを弱める。それは両方の音が大きい場合である。あるいは、一方の音が他方の音をかき消してしまう。これは、一方の音が強くて、他方の音が弱い場合である。しかし以下のことに注意しなければならない。一方が弱い音で、他方が非常に大きい音の場合のように、一方の音が他方の音を全周囲において陵駕してしまうのであれば、音はお互いをどこでもかき消してしまうというわけではない。ところで、このような音を強さで比較すると、互いを最も無にするのは、音を出す両者の結合線の辺りである。しかし、その周囲の部分ではそれほどない。それどころか、哲学者アリストテレスも言うように、音の反響はどこでも起こっているのです、これらの音のどちらも知覚されるということが起こる。なぜなら、結合線の或る部分では音は消えてしまうけれども、しかしその周囲の他の部分では反響し、聴覚まで到達するからである。⁽¹³⁾

引用4の中で、大きさが同じくらしいの音が接触して、互いを最も無にする場所とされている「結合線」(rectum-diameter)とは一体どこのことなのであろうか。これは音を、音源を中心に周囲に広がっていく円形の波から生じるものとして捉え、このような音源が複数ある場合に、そこから周囲に広がっていく音波の円どうしが重なるところのうちの或る部分をつないでいった線のことを、アルベルトゥスは結合線と呼んでいるようである。このことは次の箇所から推測される。

引用5

音と、水の中に投げ入れられた石とには、同様のことが起こる。石は、落ちたところで(円の)中心として在り、そして円周で水は円形に動かされ、石の衝撃が続く限り、円はますます広がって離れていく。(中略)音も空氣中で同じ様に發生し、最初に音を發するものは中心の場所として在り、音は空氣の円形運動上で溢れ出す。(中略)反対から来る幅の広い円は部分的に触れあい、その部分は点のようにして在る。そして同じこの場所で、一方の円が他方の円を無にする。しかし他の部分に在る湾曲部分は互いに触れ合わず、互いに無にもしない。そしてこの部分では音の形成が在る。そしてここから再び隣の空氣中に音が生じる。⁽¹⁴⁾

引用4、5からすると、アルベルトゥスにはどうやら、現代科学が言うところの音の干渉と似たアイデアがあったようである。干渉とは、何であれ複数の波が重なり合う場合に、それぞれの波の位相(音波の場合は空氣の濃淡)が異なっている地点では波が互いを弱め合い、位相が重なっている地点では波が互いを強め合うという現象のことである。引用5は特に、これと似たアルベルトゥスの音理解をよく表しているように思われる。

ところで、現代科学には波の独立性という考え方があつた。それは、重なり合った波が離れた後は、初めからそれぞれが単独に進んでいたのと同じ様に波が進んでいく性質のことである。これと類似した考えまでアルベルトゥスが持っていたかどうかは今のところ不明であり、引用4、5からははっきりとは読み取れない。しかしもし仮にアルベルトゥス

がこれと似た考えを持っていたとしても、それでもやはりアルベルトゥスが、音には対立が生じる場合があると考えていたことは確かであるようである。それはアルベルトゥスが引用4の箇所、音について、「対立していて」(contrarii)「妨害し合って」(obviantes)「かき消して」(destruit)「互いを無にする」(confringunt se)「消えてしまふ」(corruptis)といったような表現を頻繁に用いているところから明らかであるように思われる。

以上の考察から、音を生じさせるものである空氣の溢れ、また、それを生じさせつつ音に形象を与えるもの、あるいはその運動には、光・光輝とは違って、対立するものが存在するので、光・光輝のように限定されて感覚対象に成るといふようなことは、特別に大きな音が生じるような場合を除けば、本質的には必要ないとアルベルトゥスは考えていたと解釈すべきであるように思われる。実際、そのような議論が音について展開されているテキストも今のところどこにも見当たらないのである。

ところで現代科学では、光もまた波であり、干渉すると考えられている。一般の光源から出る光は波の位相が不揃いなので、そのままでは干渉現象は起こらないけれども、スリットなどを使って同じ光源の光を分割すれば、光も干渉することが知られている。もし仮にアルベルトゥスがこれと似た考えを持っていたとしたら、音波には波であるがゆえに対立するものが存在するとした以上、光にも対立するものが存在すると思えなければならなかったことだろう。しかしアルベルトゥスはそうは考えなかった。それゆえ、アルベルトゥスが、光・光輝には対立するものが存在しないと考えたのは、光を波や粒子と考える現代科学とは、かなり異なる立場に立つてのことであつたということも、ここで明らかとなるように思われる。

三 音 声

アリストテレスは、聴覚について論じている『靈魂論』第二卷第八章の中で、聴覚対象である音の一種として音声

取り上げ、かなりの紙面を割いていろいろと論じている。⁽¹⁵⁾ またこれに倣ってアルベルトゥスも、アリストテレスの『靈魂論』に対応する自身の著作の聴覚論の部分で、音声についてかなり詳しく論じている。⁽¹⁶⁾

では、一で掲げた問題を音声にも当てはめてみることにしよう。音の一種である音声を生じさせ、それに様々な形象を与えるものは一体何であろうか。音声も音である以上、二で見たような音一般の原因と全く同じものを原因として考えるべきであろうか。確かに、音であるかぎりでの音声を考察するというのであればそれでよからう。しかしながら、音声である限りでの音声を生じさせるもの、音声である限りでの音声に形象を与えるものは何かと問うならば、音声だけにしかなく、音一般には見出すことができないようなものをまず突き止め、その上でその原因を考えなければならぬだろう。

では、音一般には見出されず、音声だけにしか見出せないものとは一体何であろうか。アルベルトゥスに言わせれば、それは諸事物の概念を表示するということである。だから、音声である限りでの音声を生じさせ、それに形象を与えるものは、アルベルトゥスによれば、諸事物の概念を有している者、知性を有している者でなければならないことになる。

引用 6

音声は感情を表示するものではなく、概念を表示するものである。なぜなら、音声とは、心の概念を表す音だからである。そしてそれゆえに音声は、諸事物の概念を抱えている知性を有している者のものでなければならず、音声に形相を与えるのは概念を表現するためなのである。ところで、感情を有しているものである他の動物は、自身の感情を表現する音を発するので、音声は発しない。⁽¹⁷⁾

アリストテレスは、『靈魂論』第二巻第八章の中では、音声のことを「魂を持つものの（発する）音」⁽¹⁸⁾「動物の（発する）音」⁽¹⁹⁾としか言っておらず、概念や知性についてはまったく言及していない。それに近い表現としてはせいぜい、

「音声は表示する音である⁽²⁰⁾」という言葉くらいである。アルベルトゥス自身においても、音声は、人間を含めた動物が発する音なのか、人間だけが発する音なのかについては発展があるようで、一二四五—四六六年頃成立したと思われる『人間論』では、「多くの動物が音声を発し、人間だけが音声を発するのではない⁽²¹⁾」と言っている。しかし、一二五四—五七年頃成立したと思われる『靈魂論』では、引用6に見られる通り、音声は人間だけが発する音であるというアルベルトゥス独自の立場が確立されているのである⁽²²⁾。

このように、アルベルトゥスにとって、音声である限りでの音声を生じさせ、それに形象を与えるものは人間であるということになるのであるが、それはより正確に表現すれば、表象し知性認識する者が持つ理性的能力である。

引用7

「説明する能力」と言われる理性の能力は、発声器官で空気を打つことによって、形相付けられるものである音声に、表象し知性認識する者が有する形象、類似を刻印する。そしてこの形象を受け取る空気に発声の道具を通して触れる。つまり、触れることによって空気に作用し、作用することによって空気を表示活動へと変化させるのである⁽²³⁾。

ここで言われている「表象し知性認識する者が有する形象・類似」とは恐らく、音声の音としての形象と、諸事物の概念のことであろうが、それらを、特に概念を音声に「刻印する」とは一体どのような事態なのであろうか。それは、アルベルトゥスによれば、人間どうしの間ですでに確立している記号に諸事物を表示させるということである。

引用8

音声とは、記号へと形相付けられた音である。この記号は約束に従って事物を表示する。だから音声は記号として事物について知らしめるのである。それゆえ、記号が確立しているのを知らない者は、その音声を知覚しない。だから、異なる言語で語る者同士はお互いを理解しないのである⁽²⁴⁾。

つまり、音声である限りでの音声を生じさせ、それに形象を与えるということは、まず、諸事物の概念を有している人間どうしの間で、或る音を或る概念の代わり、つまりその概念を表示する記号とすることが予め了解され、その上で、その約束事に従って、或る事物の概念を表現するために、その概念の記号とされている音を発するということであろう。

このように、アルベルトゥスによれば、音声である限りでの音声を生じさせ、それに形象を与えるものは人間の理性的能力である。ではここで、一で掲げたもう一つの問題を音声に適用してみることにしよう。すなわち、このような人間の理性的能力は、光・光輝が限定されて色と成るのとちょうど同じ様に、限定されて音声に成るというようなことはあるのだろうか。一で述べた通り、アルベルトゥスによれば、光・光輝は空気や水など透明なものの現実態であり、それ以外の不透明なものは、空気や水の元素を有している限りで光・光輝を分有する。光・光輝は、不透明なものに分有されることによって限定されて個々の色と成るのであった。これと似た構造が理性的能力と音声との間に見出されるかどうかということがここで問題となる。

音声の場合、理性的能力は人間の能力、現実態であり、音声はその能力を、概念の記号である限りで分有していると言って差し支えないだろう。ではここで、理性的能力は何らかの限定を受けることによって音声に成るというようなことが言えるであろうか。少なくとも言えることは、理性的能力は音声において時間的に限定されているということである。なぜなら、古代中世の一般的な常識に従えば、理性的能力やそれが有する概念は永続的なものであるのに対し、音声は時間的に永続的なものではないからである。

引用 9

子音・母音や音節のそれぞれの形成は分けられており、何か一つのものによってつながられることもないので、分割されているものの類に属するのであって、連続的なものの類には属さない。しかし、連続的な時間で測られるので、数ではなく、上で明らかにした通り、運動ではないけれども、運動（息を保持すること）の内に在るのである

が、運動は諸部分に分かれると永続性を有さないの、子音・母音と音節のそれぞれの形成は、その諸部分においては、いかなる永続性も有していない。⁽²⁵⁾

音声は通常、複数の子音・母音、音節から構成される。そして、或る1つの子音・母音や音節は、必ずその他の子音・母音、音節と時間的前後関係で区別される。これらはばらばらに語られるのではなく、一息の中で連続的に語られ、聞かれ、理解されるけれども、それでもやはり依然として各子音・母音、音節は区別されたまま語られるのであり、そもそも息の保持に時間的限界があるから、それらから構成されている音声に永続性が無いのは明らかである。

このような、理性的能力やそれが有する概念と音声との対照は、引用9の箇所への私の勝手な読み込みではなく、アウグスティヌスに由来するものであり、アルベルトゥスもそれを自覚しているのは明らかである。⁽²⁶⁾ アウグスティヌスは『ヨハネ福音書註解』で次のように述べている。

引用10

何であれ、語られ、過ぎ行くものはどれも音であり、子音・母音であり、音節である。響く言葉は過ぎ行く。⁽²⁷⁾ しかし、音が表示し、語った思惟者のうちと、聞いた知性認識者のうちに在るものは、響く言葉が行過ぎて留まる。

このように、永続的なものである人間の理性的能力や、それが有する概念が、時間的に限定されて、永続的ではない子音・母音や音節から構成される音声に成ると捉えることが一応可能であるとしても、それを、光・光輝が限定されて色に成るのと同様の限定であるとアルベルトゥスは考えていたのであろうか。結論を先取りして言えば、アルベルトゥスは確かにそのように考えていたと思われる。なぜなら、アルベルトゥスにとって色と音声とは非常に類似したものであるからである。

その理由は以下の通りである。

アリストテレスは、自身の『感覚と感覚されるものについて』第一章436b18-437a15において、視覚、聴覚、嗅覚

は、これらの感覚を持つものすべてにとつては生存 (*existence*) のためにあるが、賢慮 (*prudence*) を持っている動物にとつては、善く在ること (*to be*) のためにあると言っている。そしてその直ぐ後で、これらの感覚のうち、必要なもの／必然的なもの (*necessary*) という観点では、視覚がより善く、知性 (*wisdom*) や賢慮という観点では、聴覚が付带的により善いと言っている。

聴覚が付带的により善いと言われるのは、それが音一般ではなく音声だけを対象とする場合に限られるからであるということは、この直ぐ後の箇所を読めば分かる。しかし、よく分からないのは、視覚がより善いと言われるところの「必要なもの／必然的なもの」という観点、聴覚が付带的により善いと言われるところの「知性」や「賢慮」という観点である。両者の内容も、両者の関係も、その直前でなされている区別、すなわち、「生存のため」と「善くあることのため」という区別との関係も、このままではほとんど何も分からない。たとえばトマス・アクィナスは、⁽²⁸⁾「必然的なもの／必然的なもの」という観点と、「生存のため」ということを結び付けて解釈している。これに対してアルベルトゥスは、自身の『感覚と感覚されるものについて』第二章の中で、視覚と聴覚がそれぞれの観点でより善いと言われるのはどちらも、賢慮を持っている動物にとつての場合、より善く在るための場合であると解釈した上で、さらに、両感覚がより善いと言われる観点について、かなり独特な解釈を示す。

引用 11

或る者が知ることはすべて、学習して知るか発見して知るかである。だから、知を獲得する仕方にも二つある。それゆえ、我々が述べた二つの感覚のうち、発見による知に関しては、視覚の方が、それ自体で理解されてもより善い。しかし、教えられることによつて学んで知を得る者にとつては、聴覚の方が付带的により善い。ところで、発見による知に関して視覚の方が善いということは明らかである。なぜなら、視力は諸事物の多くの相異、様々な相異を明らかにするからである。さて、多くのものの多くの相異と私が呼ぶのは以下の理由による。すなわち、すべ

ての物体が色を分有するのは、後で明らかにされるであろう通り、光輝が色の実体であるということからである。つまり、それぞれの物体は光輝を分有する分だけ色を分有する。一方、光輝の分有は、単純物体、複合物体すべてに何らかの仕方で見出されるのである。(中略)一方聴覚は、物音や響きの相異しか知らしめないが、一部の動物においては、表象を伴って述べられる音声の相異を知らしめる。だから、聴覚が、そこからすべてのものについての普遍的な知が受け取られるところのものを普遍的に知らしめるものであるのは付帶的にでしかない。実際、聴覚が知恵に多大に貢献するのは付帶的にでしかないのである。しかし、音声が諸事物を表示するということは付帶的に起こることである。だから言葉が聞こえると、言葉の概念も知性認識されるのである。⁽²⁹⁾

アルベルトゥスによれば、視覚、聴覚ともに、より善いと言われるのは知に關してのことであり、視覚がより善いのは発見の知に關してのことであり、聴覚がより善いのは学習の知に關してのことである。そして、発見の知において視覚がより善いのは、どの物体も光輝を分有し、それ故に色を分有するからである。一方、学習において聴覚がより善いのは、音声がどの事物の概念でも表示するからである。引用10の「そこからすべてのものについての普遍的な知が受け取られるところのものを普遍的に知らしめる」とは、その後の下りから言って、諸事物の概念を表示するという意味であろう。また、「付帶的に」と言われているのは、「記号によって」という意味であろう。それは次の箇所からも推測される。

引用12

聴覚が「感覚のなかの第二のもの」と言われるのは三つの理由のためである。その一つは、『感覚と感覚されるものについて』という著作の冒頭で触れられている理由であるが、知に關して視覚の方がより善いということである。というのも、すべての物体は色か光を有しているか、あるいは暗いため、視覚に把握されるがゆえに、視覚は多くの相異を明らかにするからである。つまり、すべての物体が視覚の対象なのである。一方聴覚は、物音、つまり響

きの相異を明らかにし、自体的にはなく付帶的に学習に貢献する。だから、視覚は、諸事物の類似を自体的に明らかにするがゆえに、自体的に知恵に貢献するが、一方聴覚は、名前が諸事物の類似の記号であるがゆえに、自体的にはなく記号において諸事物の類似を明らかにする。だから視覚は、学習能力のあるものの中で第一の感覚であり、聴覚は第二なのである。しかし、名前はすべての事物の記号である。すなわち、視覚対象である事物、嗅覚対象である事物、味覚対象である事物、触覚対象である事物、知性認識対象である事物、そして聴覚対象そのものの記号でさえある。だから、すべてのものについての賢慮は聴覚によって教えられて理解されるが、視覚によってすべては理解されない⁽³⁰⁾。(傍点筆者)。

つまり視覚も聴覚も、その対象がどの物体にも分有されたり(色の場合)、どの事物をも表示したり(音声の場合)するが故に最も善いのである。言い換えれば、色と音声とは共に、極めて広い範囲の事物を感覚対象にするものであるという点、そしてそのことによってそれぞれの感覚の善さを、知性を持つ動物、つまり人間にとって最高のものにするという点で、非常に類似したものであると考えられているように思われるのである。

四 結 語

アルベルトゥスによれば、音一般を生じさせるものである空氣の溢れは、光・光輝が限定されて色に成るのと同様に限定されて音に成るというようなことはない。それに対して、音声である限りでの音声を生じさせるものである人間の理性的能力は、光・光輝と同様に限定されて音声と成る。ここで「同様に」と言っているのは、この限定が起こると同時に、非常に多くの事物が感覚対象と成るというような仕方である、という意味である。

このようにして、或る感覚対象を生じさせるものが限定されてその感覚対象自体に成るという構造は、アルベルトゥスによれば、光・光輝→色の場合と、理性的能力→音声の場合に独特な構造であるようである。だから、視覚対象

を生じさせるものである光・光輝は、他の感覚対象を生じさせるものに比べて、音声を生じさせるものである理性的能力により類似していると言いうことができるのである。

また、二の最後で述べた通り、現代科学において光は波でもあると理解されているので、それはむしろ空氣の溢れ、疎密波である音波と類似していると言いうべきであろう。しかしアルベルトゥスは光・光輝を、空氣の溢れよりも理性的能力の方により類似したものと理解している。それゆえアルベルトゥスの立場は現代科学の立場と比較しても、光・光輝を理性的能力に類似したものとして捉えられていると言いうことができるように思われる。

ただし、このようなアルベルトゥスの光・光輝についての立場が、その後の西欧の自然哲学・自然科学史全体にどのような影響を与えたのか、その詳細については今後の課題として残さざるを得ない。

注

- (1) マイシャイプの語に従う。J. A. Weisheipl, "The life and Works of St. Albert the Great", *Albertus Magnus Commemorative Essays* 1980, pp. 13-51.
- (2) Plotinos, *Enneades*, V, 6, 4.
- (3) 拙論「アルベルトゥス・マグヌスの視覚論」『中世哲学研究 VERITAS』(京大中世哲学研究会) 第二十三号、二〇〇四年、四九―六一頁参照。
- (4) ただしアルベルトゥスは、音と運動とを別種の感覚対象と考えるアリストテレスの『靈魂論』の立場に従って、空氣の運動は音々のものであるべく、あへて音の原因と考えず。Cf., *De homine*, q. 24, a. 2, c; *De anima*, lib. 2, tract. 3, c. 18, p. 125, l. 65-p. 126, l. 10.
- (5) sicut enim dicit Algazel in *Physica* sua, sonus est quiddam quod fit in aere propter inundationem accidentem aeri ex motu fortissimo proveniente ex vehementi aliquorum inter se percussione vel separatione. Dicimus ergo, quod sonus est qualitas sensibilis, proveniens ex fractione motus aeris, et ens cum illo. *De homine*, q. 24, a. 1. c.

- (9) *πλήρη γὰρ ἔστιν ἡ ποιοῦσα*. Aristoteles, *De anima*, lib. 2, c. 8, 419b10-11.
- (7) *De homine*, q. 24, a. 4. c
- (8) (sonus) diversitates specierum in acuto et gravi recipit ex diversitate percussorum. Videmus enim, quod aliter sonat metallum et aliter lignum; quas differentias sonus non haberet, si esset aer solus subiectum eius.
- De anima*, lib. 2, tract. 3, c. 18, p. 125, ll. 24-27. Cf., *De homine*, q. 24, a. 4, ob. 1.
- (6) 46 離 2 7 25 *De homine*, q. 24, a. 4, c. 繪 聖 °
- (10) Aristoteles, *Physica*, lib. 4, c. 8, 215a1-4.
- (11) *De anima*, lib. 2, tract. 3, c. 21, p. 129, ll. 16-23. Cf., *De homine*, q. 24, a. 3, c.
- (12) *τὴν μὲν οὖν ἀνω ποιῶσαι φερέν ἡ κοίφος, ὅταν ἐσθθῇ καὶ λάβῃ τὴν ἀρχὴν ἀπὸ τῆς δυνάμεως, τὴν δὲ κάτω πάλιν ἡ βαρὺς*. Aristoteles, *De caelo*, lib. 3, c. 2, 301b24-26. Cf., Aristoteles, *Physica*, lib. 8, c. 10, 266b25-267a20; *De caelo*, lib. 4, c. 3 圖 獸.
- (13) SOLUTIO. Dicimus, quod soni obviantes contrarii et excellentes infringunt se in loco contactus, ita quod ex ambobus generatur unus confusus, et hoc quando ambo fuerint excellentes, vel alter destruit alterum, et hoc quando unus fuerit fortis et alter debilis. Sed tamen notandum, quod non ubique corrumpunt se, nisi alter oblineat alterum in tota circumferentia, sicut quando unus est debilis, et alter valde vehemens. Sed quando comparantur in fortitudine, tunc maxime confringunt se ad rectum diametrum sonantium: sed in illa parte circumferentiae non ita est: et cum ubique fiat reflectio in sono, ut dicit Philosophus, tamen contingit, quod uterque illorum sonorum adhuc percipitur: quia licet in quadam parte sui sit corruptus, tamen in altera parte suae reflectitur ad auditum.
- De homine*, q. 24, a. 6, c.
- (17) et est simile de sono et de lapide proiecto in aquam, qui ubi cadit, quasi centrum est, et commovetur aqua in circuitu circulariter, et dilatantur circuli plus et plus distantes, quamdiu durat impetus lapidis. (中 響) Et similiter generatur sonus in aere, et est primum sonans sicut locus centri, et inundat sonus super circulationes aeris; (中 響) circuli lati, ex opposito venientes, se tangunt in parte, quae est quasi punctum, et ibidem unum confringit aliud; sed arcus in aliis partibus se nec tangunt nec confringunt, et in illis est soni figuratio, et ab illis iterum fit in aere vicino,

significatum, *De anima*, lib. 2, tract. 3, q. 22, p. 131, ll. 47-48, 「同様に、アウグスティヌスは次のように言っている。言葉には二つのものがある。それは、過激に行く音声と「留まる表示対象」とびなる」 Item, Dicit Augustinus, quod in verbo duo sunt: vox quae transit, et significatum quod manet: *De homine*, q. 25, a. 2, ob. 2.

(27) Ergo quaecumque dicuntur et transeunt, soni sunt, litterae sunt, syllabae sunt. Hoc verbum transit, quod sonat: quod autem significavit sonus, et in cogitante est qui dixit, et in intelligente est qui audiuit, manet hoc transeuntibus sonis. Augustinus, *In Iohannis Evangelium*, tract. I, 8.

(28) Thomas Aquinas, *In De sensu et sensato*, l. 2, n. 24; n. 27.

(65) Sed quia omne quod quis scit, aut addiscens, aut inventiens novit: et sic duo sunt modi acquirendi scientiam: ideo horum ipsorum quos diximus duorum sensuum ad notitiam quae est per inventionem, melior est visus per seipsam solum sumptus: sed discenti per doctrinam summenti scientiam, secundum accidens melior est auditus. Quod autem visus sit melior ad notitiam quae est per inventionem, patet: multas enim et multimodas rerum ostendit differentias virtus visiva. Multas autem voco differentias multorum: omnia enim corpora colore participant, eo quod, sicut inferius ostendemus, lumen colorum est hypostasias: et unumquodque corporum in tantum participat colore, in quantum participat lumine: participatio autem luminis aliquantiter in omni corpore simplici et mixto invenitur. (耳聞) Auditus autem non nuntiatur nisi differentias strepitus et sonorum, et in paucis animalibus annuntiat differentias vocis quae cum imaginatione profertur: et ideo non nisi per accidens annuntians est ea universaliter de quibus accipitur scientia universalis de omnibus. Secundum accidens enim proficit ad sapientiam multum auditus. Hoc autem accidens est quod vox significat res. Et ideo per hoc quod sermo auditur, intentio sermonis intelligitur. *De sensu, et sensato*, c. 2.

(32) *auditus dicitur secundum sensus propter tres causas. Quarum una est, quae tangitur in principio libri de Sensu et sensato-*

ostendit similitudines rerum secundum se, sed in signo, eo quod nomina signa sunt similitudinis rerum, ideo visus primus sensus est inter disciplinabiles, et auditus secundus. Quia vero nomina sunt signa omnium visibilibus rerum, scilicet odorabilem, gustabilem, et tangibilem, et etiam ipsorum audibilem, idcirco accipitur per auditum prudentia de omnibus per doctrinam, per visum autem non de omnibus: *De homine*, q. 23, c. un., ad ultimum.

(筆者 はなやし・いふ 明治学院大学文学部非常勤講師／西洋哲学史)

knowledge itself. The importance of the analysis of the *sensus communis* in “Essays” can be seen from another perspective in this light.

Parallelism of Color and Voice Albert the Great on the sense of hearing

by

GO KOBAYASHI

Part-time Lecturer
Meijigakuin University

Albert the Great, one of the most representative natural philosopher and natural scientist in the Western history of ideas, considered the similarity between light and the rational power in the context of the Aristotelian sense perception theory. I will investigate this consideration in this paper in order to find any key to know why light has been extremely important all through the Western history of natural science and natural philosophy. According to Albert, light in itself is not the proper object of the sense of sight because light in itself is not a color, which is the proper object of sight. Light is the main cause of a color. For, when light is received not in transparent bodies, like air, water, or glass, but in various kinds of opaque bodies, the actuality of light is limited, so that light becomes this or that particular kind of color. On the other hand, the proper object of the sense of hearing is a sound and the main cause of it is the overflowing of air. However, the overflowing of air is different from light because, when a sound is heard, the actuality of the overflowing of air is usually not limited as in the case of light. Although a voice is also a kind of sound, the main cause of a voice as such is rather a man’s rational power, and when a voice is heard, a man’s rational power is limited in the same way as light. For, light is participated and limited in various kinds of opaque bodies, that is to say, in almost all of terrestrial bodies, and thereby makes them colorful, or perceptible. Likewise, a man’s rational power, which is essentially eternal, is limited temporarily in syllables so as to be voices, and the voices signify almost all of things, and thereby make them audible in a sense, or perceptible. Thus, for Albert, light and a man’s rational power are very similar to one another.